

松風

古名

松風
村
雨

觀
阿
弥
作

季	は	地	は	ツ	レ	シ	テ	ワ	キ
秋		摂	津	村	雨	松	風	旅	僧

「是は諸国一見の僧にて候。我いまだ西国を見ず候ふ程に。此度思ひ立ち西国行脚と心ざして候。あらうれしや急ぎ候ふ程に。是はゝや津の国須磨の浦とかや申し候。又是なる磯辺を見れば。様ありげなる松の候。如何さま謂のなき事は候ふまじ。此あたりの人尋ねばやと思ひ候。

ワキ「さては此松は。いにしへ松風村雨とて。二人の海人の旧跡かや。痛はしや其身は土中に埋もれぬれ

ども。名は残る世のしるしとて。変はらぬ色の松一木。緑の秋を残す事のあはれさよ。

詞「かやうに経念佛して弔ひ候へば。實に秋の日のならひとて程なう暮れて候。あの山本の里までは程遠く候ふ程に。是なる海人の塩屋に立ち寄り。一夜を明かさばやと思ひ候。

シテ、ツレ一声「汐汲車わづかなる。浮世に廻るはかなさよ。

ツレ「波こゝもとや須磨の浦。

二人 「月さへぬらす袂かな。

シテサシ
「心づくしの秋風に。海は少し遠けれども。彼行平
の中納言。

二人 「関吹き越ゆると詠め給ふ。浦回の波の夜々は。実
に音近き海人の家。里離れる通路の。月より外
は友もなし。

シテ 「実にや浮世の業ながら。殊に拙き海人小舟の。

二人 「渡りかねたる夢の世に。住むとや云はんうたかた

の。汐汲車よるべなき。身は海士人の袖ともに。
思ひを乾さぬ心かな。

下歌地

「かくばかり経がたく見ゆる世の中に。羨ましくも
澄む月の。出汐をいざや汲まうよ。く。

上歌
「影はづかしき我姿。く。忍車を引く汐の。跡に

残れる溜水。いつまで澄みは果つべき。野中の草
の露ならば。日影に消えも失すべきに。是は磯辺
に寄藻かく。海人の捨草いたづらに。朽ち増り行

シテツレ
く袂かな。く。

シテツレ
「おもしろや馴れても須磨の夕暮。海人の呼声幽
にて。

二人
「沖に小さき漁舟の。影幽なる月の顔。雁の姿や友
千鳥。野分汐風いづれも實に。かゝる所の秋なり
けり。あら心すごいの夜すがらやな。

シテ
「いざく汐を汲まんとて。汀に満干の汐衣の。
ツレ
「袖を結んで肩に掛け。

シテ
「汐汲む為めとは思へども。
ツレ
「よしそれとても。

シテ
「女車。

地
「寄せては帰る渴をなみ。く。蘆辺の田鶴こそは
立ちさわげ。四方の嵐も音添へて。夜寒なにと過
さん。更け行く月こそさやかなれ。汲むは影なれ
や。焼く塩煙心せよ。さのみなど海士人の。憂き
秋のみを過さん。松島や小島の海人の月にだに。

影を汲むこそ心あれ。／＼。

「運ぶは遠き陸奥の。其名や千賀の塩竈。」

シテ 「賤が塩木を運びしは。阿漕が浦に引く汐。」

地 「其伊勢の。海の二見の浦。二度世にも出でばや。」

シテ 「松の村立かすむ日に。汐路や遠く鳴海潟。」

地 「それは鳴海潟。こゝは鳴尾の松影に。月こそさはれ蘆の屋。」

シテ 「灘の汐汲む憂き身ぞと。人にや誰も黄楊の櫛。」

地 「さしくる汐を汲み分けて。見れば月こそ桶にあれ。」

シテ 「是にも月の入りたるや。」

地 「うれしや是も月あり。」

シテ 「月は一つ。」

地 「影は二つ満つ汐の。夜の車に月を載せて。憂しともおもはぬ汐路かなや。」

「塩屋の主の帰りて候。宿を借らばやと思ひ候。如

何に是なる塩屋の内へ案内申し候。

ツレ詞
「誰にて渡り候ふぞ。」

ワキ
「是は諸国一見の僧にて候。一夜の宿を御借し候へ。」

ツレ
「暫く御待ち候へ。主に其由申し候ふべし。如何に申し候。旅人の御入り候ふが。一夜の御宿と仰せ候。」

シテ詞
「余りに見苦しき塩屋にて候ふ程に。御宿は叶ふまじきと申し候へ。」

ツレ
「主に其由申して候へば。塩屋の内見苦しく候ふ程に。御宿は叶ふまじき由仰せ候。」

ワキ
「いやく見苦しきは苦しからず候。出家の事にて候へば。平に一夜を明かさせて賜はり候へと重ねて御申し候へ。」

ツレ
「いや叶ひ候ふまじ。」

シテ
「暫く。月の夜影に見奉れば世を捨人。よしくかゝる海人の家。松の木柱に竹の垣。夜寒さこそと思

へども。蘆火にあたりて。御泊りあれと申し候へ。

ツレ
「此方へ御入り候へ。

ワキ
「あらうれしやさらばかう参らうするにて候。

シテ詞
「始めより御宿参らせたくは候ひつれども。余りに見苦しく候ふ程に。さて否と申して候。

ワキ
「御志有難う候。出家と申し旅といひ。泊りはつべき身ならねば。何くを宿と定むべき。其上此須磨の浦に心あらん人は。わざともわびてこそ住むべけれ。わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に。藻塩たれつゝわぶと答へよと。行平も詠じ給ひしとなり。又あの磯辺に一木の松の候ふを。人に尋ねて候へば。松風村雨二人の海士の旧跡とかや申し候ふ程に。逆縁ながら弔ひてこそ通り候ひつれ。あら不思議や。松風村雨の事を申して候へば。二人共に御愁傷候。是は何と申したる事にて候ふぞ。

シテツレ
「實にや思ひ内にあれば。色外に顕はれさぶらふぞ

や。わくらはに問ふ人あらばの御物語。余りにつかしう候ひて。猶執心の閻浮の涙。ふたゝび袖をぬらしさぶらふ。

ワキ詞

「なほ執心の閻浮の涙とは。今は此世に亡き人の詞なり。又わくらはの歌もなつかしいなど、承り候。かたぐ不審に候へば。二人共に名を御名のり候へ。

二

人「恥かしや申さんとすればわくらはに。事問ふ人も

なき跡の。世にしほじみてこりずまの。恨めしかりける心かな。此上は何をかさのみ包むべき。是は過ぎつる夕暮に。あの松陰の苔の下。亡き跡とはれ参らせつる。松風村雨二人の女の。幽靈是まで來りたり。さても行平三年が程。御つれぐの御船遊び。月に心は須磨の浦。夜汐を運ぶ海人乙女に。おとゞひ撰ばれ参らせつゝ。折にふれたる名なれやとて。松風村雨と召されしより。月にも

馴るゝ須磨の海人の。

シテ
「塩焼衣色替へて。

二人 「かとりの衣の空焼なり。

シテ
「かくて三年も過ぎ行けば。行平都に上り給ひ。

ツレ 「幾程なくて世を早う。去り給ひぬと聞きしより。

シテ
「あら恋しやさるにても。又いつの世の音信を。

地 「松風も村雨も。袖のみぬれてよしなやな。身にも及ばぬ恋をさへ。須磨の余りに罪深し。跡弔ひて

給び給へ。

地 「恋草の。露も思ひも乱れつゝ。く。心狂気に馴衣の。巳の日の祓や木綿四手の。神の助けも波の上。あはれに消えし憂き身なり。

クセ
「あはれ古へを。思ひ出づればなつかしや。行平の中納言。三年はこゝに須磨の浦。都へ上り給ひしが。此程の形見とて。御立烏帽子狩衣を。残し置き給へども。之を見る度に。弥益の思草。葉末

に結ぶ露の間も。忘らればこそあぢきなや。形見こそ。今はあだなれ是なくは。忘るゝひまも有りなんと。よみしも理や。なほ思ひこそは深けれ。

シテ
「宵々に。ぬぎて我寝る狩衣。

地
「かけてぞ頼む同じ世に。住むかひあらばこそ。忘形見もよしなしと。捨てゝも置かれず。取れば面影に立ち増り。起臥わかで枕より。跡より恋の攻め来れば。せんかた涙に。伏し沈む事ぞ悲しき。

シテ
「三瀬河。絶えぬ涙の憂き瀬にも。乱るゝ恋の淵はありけり。あらうれしやあれに行平の御立有るが。松風と召されさぶらふぞやいで参らう。

ツレ
「あさましや其御心故にこそ。執心の罪にも沈み給へ。娑婆にての妄執を。なほ忘れ給はぬぞや。あれは松にてこそ候へ行平は御入りもさぶらはぬ物を。

シテ
「うたての人の言事や。あの松こそは行平よ。たと

ひ暫しは別るゝとも。松とし聞かば帰りこんと。

連ね給ひし言の葉は如何に。

ツレ「実になふ忘れてさぶらふぞや。たとひ暫しは別るゝとも。待たば来んとの言の葉を。

シテ「こなたは忘れず松風の。立ち帰りこん御音信。

ツレ「終にも聞かば村雨の。袖しばしこそぬるゝとも。

シテ「待つに変はらで帰りこば。

ツレ「あら頼もしの。

シテ「御歌や。

地「立ち別れ。 (中の舞)

シテ「いなばの山の峰に生ふる。松とし聞かば今帰り来
ん。それはいなばの遠山松。

地「是はなつかし君こゝに。須磨の浦回の松の行平。

立ち帰りこば我も木陰に。いざ立ち寄りて磯馴松
の。なつかしや。 (破の舞)

地「松に吹き来る風も狂じて。須磨の高波はげしき夜

すがら。妄執の夢に見みゆるなり。我跡弔ひて給
び給へ。暇申して帰る波の音の。須磨の浦かけて。
吹くや後の山おろし。関路の鳥も声々に。夢も跡
なく夜も明けて。村雨と聞きしも今朝見れば。松
風ばかりや残るらん。く。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第五輯』大和田建樹著